

勢多本類聚国史目録のこと

相 田 満

要 旨 編年体である六国史の記載を中国の類書にない分類再編集した『類聚国史』は、菅原道真の編纂により、寛平四年（八九二）に完成・成立した。中国有数の「類書」と対置されるほどに高い評価を受け、元来本文二〇〇巻目録二巻系図三巻の計二〇五巻であったが、散逸して現存するのは六一巻のみで、亡佚巻の部立については、これまで坂本太郎氏をはじめとして、『類聚国史』内に記載される逸亡項目や、稀々に発見される逸文を基礎に推定されることが専らであった。

ところが、無窮会図書館神習文庫蔵『勢多本類聚国史目録』に記載される内容を検討した結果、新たに二〇巻分の部立が未報告のものであることが判明した。これにより、既存の研究成果とあわせれば総計一六〇巻分の部立が明らかとなる。

本稿では、当該資料を紹介するとともに、その妥当性を検討することにより、そこからさらに『類聚国史』の部立てがどのような配列原理で設定されたかということについても考察を進める。すなわち、『類聚国史』の配列原理が、それを使用する際の便宜を図るためになされたのではないかという視点に立ち、二官八省の組織を円滑に機能せしめるべく工夫されたと考える。

【一】『類聚国史』の評価

史書から、史観や文学的営為を読みとろうとする立場を採ろうとする者にとつては、『類聚国史』は異質の存在であろう。この書物は、名称と内容に「国史」を含みはするものの、『日本書紀』以来の五国史、すなわち『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』と、後補と思しき『日本三代実録』とが合わさった六国史の内容が、「部類」という観点のもとに、見事に分断再編されているからである。そのため、かかる基準を適用する限りにおいては、『類聚国史』の、史書としての評価は高くない。

しかし、類書や百科事典のような類聚編纂物としては、『類聚国史』は中国有数の「類書」に対置されるほどに高い評価を古来より受け続けてきた。

たとえば、宝暦三年（一七五三）から安永九年（一七八〇）にわたり書き継がれた山岡浚明『類聚名物考』（巻二六九書籍部第七）「類叢」の条には、

「されども皇覧の如きは一事にもあらず。類ひをもて小部なる物を寄集めし叢書の初なるへし。され共よつて来る所を是をや初とすへからん。皇朝にては類聚国史・新撰字鏡の^{（一）}ことを始とやいふへからんかし。」（句点・傍線筆者）

とあるように、中国では『皇覧』の類が「叢書」（当時にあつては「叢書」と「類書」を峻別する意識は少なかった）の始まりとするのに対して、日本では『類聚国史』『新撰字鏡』がその濫觴であると述べている。

また、欧米に比肩するべく、日本の百科全書の編纂を志して企画された『古事類苑』の序文（細川潤次郎…大正

三年「二九一四」にも、水戸藩の『礼儀類典』と並んでその名が挙がり、日本の代表的な類書として扱われる。

如^{キハ}菅家之類聚国史・水藩之礼儀類典、嘉^ス二恵^{コト}後学、固^ニ不^レ為^レ少^{シトハ}、然^{レドモ}其所^{ノハ}輯^{ムル}、不^レ過^ゼ二部^ニ門、未^レ可^{カラ}謂^フ之^ヲ類書、如^{キハ}二浅井氏之事纂、実我邦類書嚆矢、顧^{ルニ}其書、用^テ一人力、踰^{ヘテ}年脱^{ラス}稿^ヲ失^{スルモ}ニ於太簡^ニ亦宜^{タルカ}矣、(すなわち、菅原道真の『類聚国史』や水戸藩の『礼儀類典』などは、後学の者にとつて裨益するところ本より大である。しかし、そこで類聚されることは、浩瀚な学問体系の中の一部門に過ぎない。まだこれを類書と呼称するには及ばないのである。浅井奉政の『事纂』は、まさに我が国の類書の嚆矢に位置付けられるべきものである。しかし、その書を考えてみると、一人の力で編修され、年を越えて完成したものの、はなはだ簡略な内容となっている。それもまた、もつともなことである。と。「訓点は稿者による」)

ただし、『類聚国史』や『礼儀類典』の両書が一部門に特化した内容を持つことを傷みとしており、その総合性の面では乏しさを難じる文脈になっている。衆知を結集した本格的な百科全書として、『古事類苑』を称揚することを目的とする文章であるため、必ずしも『類聚国史』を賞賛する論理ととならないことは、致し方ない所ではあろう。また、総合性の点からは、浅井奉政の『事纂』の優秀性を称えているが、これも個人による編纂物であるため、簡潔な内容におわっていることが失点であるとしているのである。

しかし、ともかく、『古事類苑』の優秀性を説くための比較対象にされる事自体、『類聚国史』の評価の高さを裏付けるものとなっていることには変わらない。

【二】『類聚国史』のもたらしたもの

古来より、既存の情報資源を再構築することで、新たな現実に対応しようとする試みが、幾度となく繰り返されてきた。「温故知新」とでもいふべき思考様式が、過去の集積・再検証の意味合いも兼ねて、「類聚」という営為を何度もうながしてきたのである。

そこから、新たな世界観や枠組みが生み出される事が多かったことも、また事実である。神代よりはじまる、およそ千年近い先例の調査という検索行為が、「類聚」と「部類」による編纂成果物によって、迅速になしえるようになったことは、少なくとも当時においては画期的な「情報革命」であったに相違ない。

しかし、このような画期的成果も、時として既成の秩序を確認するのみにとどまり、それを支える価値体系の流動化を停止させ、凍結させようとする方向へと働くこともある。⁽²⁾

たとえば、『令義解』（天長十年十二月十五日「八三四年一月二八日」）の撰修事業は、一方で日本で明法学（唐名では律学⁽³⁾）が育たなかった遠因ともなった。奈良中葉から平安初期にかけて、様々な誕生を見た学説が、『令義解』の撰修事業により、以後法令審査の機関を設けられることなく、諸説の一つに固定されることとなったからである。このことにより、新説の発生と法律学の発展は梗塞され、以後の法律家は『令義解』を読解すれば事足りるに至った。⁽⁴⁾

では、『類聚国史』はどうだろうか。

『類聚国史』は、本来二〇〇巻・目録二巻・帝王系図三巻の構成とされるが、今では本文六一巻と、若干の逸文

が時折発見・報告されるのみで、その過半は不明である。

このことは、『類聚国史』がいつまでも使われ続けてきたものではなかったことを暗に示しているよう。

たしかに、古くは源高明（延喜十四年？～天元五〔九一四～九八二〕）の『西宮記』『凡奉公之輩、可二設備一文書』（巻十・殿上人事）には、公事にあずかる輩の必須の一書に挙げられ、信西の息男にあたる藤原俊憲『貫首秘抄』⁽⁵⁾（十二世紀末）にも蔵人必携の書としてその名が挙がるように、おおむね平安期には、宮廷社会における政務の執行の実務・実用書として貴重されていたようである。

しかし、『類聚国史』がいくら通覧性・検索性にすぐれた典籍が、いつまでも古びることなく使われ続けることを許容するほど、現実社会は素朴で因循なものではなかった訳である。

【三】『勢多本類聚国史目録』（神習二二五八）について

① 類聚国史の欠失部と『勢多本類聚国史目録』

さて、『類聚国史』の欠巻部分の推定・復元作業は、従来、おおむね次の三通りの方法で進められてきた。すなわち、

- ① 現存する巻そのものの考察
 - ② 本書の本文に加えられた注記の検討
 - ③ 本文の逸文からの推定
- である。

その成果は、『国史大系書目解題』⁽⁶⁾に吉岡真之により従来の研究を整理して記載されている通りで、現在は総計一四〇巻分の部立てが復元されるに至っている。

ところが、以下に紹介する無窮会図書館蔵『勢多本類聚国史目録』（神習三二五八）には、不明部分の二十巻分の部立ても記されており、これが正しければ、総計一六〇巻分の部立ての復元が可能になるのである。

では、この書がこれまでの研究史に上ってこなかったのは何故だろうか。

『類聚国史』の校勘本は、大正五年（一九一六）に経済雑誌社から刊行された『国史大系』以降、本格的校訂が行われてこなかった。日本史の基本典籍として、『国史大系』（吉川弘文館）が最もよく使用されるが、国史大系のシリーズ刊行については、経済雑誌社から六国史がまず刊行された（明治三十年「一八九七」→明治三四年「一九〇一」）。しかし、最初に刊行されたこともあって、版本に基づいた国史大系の本文には傷も多かった。そこで、黒板勝美が既刊の国史大系の六国史を再校訂し、新たに『類聚国史』を加え、『国史大系六国史』四冊、『国史大系類聚国史』一冊の計五冊が、大正二年（一九一三）から大正五年（一九一六）にかけて経済雑誌社から刊行された。

その後、国史大系は、昭和四年（一九二六）から昭和三九年（一九五四）にかけて吉川弘文館から全六六冊が刊行された。黒板勝美が編集し、丸山二郎らが校訂し、途中黒板が卒去の昭和二年（一九四六）以降は、丸山二郎・黒板昌夫・坂本太郎が国史大系編修会が発足し、事業の継続にあたった。

六国史部分は、その間、朝日新聞社が新たに本文校勘を施して『増補六国史』が刊行されている。朝日版六国史は、近世考証家の手になる校勘本文・注釈を取り込んでいることを特色とする。特に、河村秀根『集解』・足羽敬明『故事考』・矢野玄道『私記』の諸注を取り込んだ本シリーズの意義は大きく、六国史の全注釈が今なお完備し

ない現在にあって、今なお重要な典籍群となっているといえよう。

その朝日版六国史には無窮会図書館蔵書が多く使用されている。中でも、狩谷望之（掖斎）自筆校本、山崎知雄自筆校本は重要で、狩谷本の書き込みからは、安田躬弦本・細井貞雄本・白雲本が校勘本文に立てられ、山崎本の書き込みから、黒川春村校合本・岸本由豆流本・伴信友校合本などが新たに校勘本文として立項された。その結果、たとえば、朝日新聞社版『日本三代実録』においては、凡例に掲げられた十八本中七本が無窮会蔵本に関連するという様相を呈しているのであった。

しかし、『国史大系』の編纂に際しては、『類聚国史』や六国史部分に至っては無窮会蔵本は、凡例には見えない。このことは、無窮会創設者平沼騏一郎が神習文庫の旧蔵者、井上頼圀蔵書を購入したのが大正四年（一九一五）春という事情を考えれば、致し方なかったところであろう。^⑦『勢多本類聚国史目録』が気づかれなかった事情は、そこにあったと思われる。

② 略書誌と著者

当該書は、後補表紙外題に「勢多本類聚国史目録」と墨で直書され、元来の書名は内題「類聚国史目録」（二才左上）と思われる。縦二・七cm×横一六・六cm、全十三丁一冊の写本で、楮紙を料紙とし九行の紺色野に記載される。

蔵書印は二才に「勢多蔵書」「無窮会神習文庫」「井上頼圀蔵」「井上氏」（すべて陽刻朱角印）、「中原章武」（陰刻朱角印）とあり、奥書には「天保十三年（一八四二）壬寅臘月初冬以買得之本引合了」と記される。

印文の「中原章武」は勢多章武のこと。本姓は中原氏。『地下家伝』や『平安人物志』^⑧によれば、章武は章斐の子。京都烏丸中立売に住し、寛政十年十月二五日（一七九八年十二月二日）、七歳で正六位上に叙せられ、左衛門

大志に任ぜられた。その後、少尉に転じ、弾正小忠を兼ね、大忠に転じて文政八年十二月十九日（一八三〇年八月十七日）、明法博士、天保五年には大判事を兼ねた。位も順次累遷して嘉永五年「一八五二」には正四位下に至っている。俗称勢田豊前守、後には勢多大判事と呼ばれた。

また、その息、勢多章甫の『勢多氏備忘』『自筆本』（神習文庫二二九八四）によれば、その後、安政五年正月二日（一八五八年三月七日）に正四位上、同月二日に卒去している。享年六七歳であった。

著作には温故録（文化十「一八一三」）、光格天皇御讓位次第（文化十四「一八一七」）、准后御用掛記・瑞放光院宮御本所掛加勢記（文政九「一八二六」）、竹御所御用掛雜記（天保十三「一八四二」）、長橋殿雜記・欽宮御方御用仮日記（天保六「一八三五」）、服仮問答、思ひの儘の記（日本隨筆大成・一期一三所収）などがある。それらの内、温故録と服仮問答は無窮会図書館にも蔵される。⁽⁹⁾

なお、無窮会には息男章甫^{のりみ}の著述も少なからず蔵されている。本書には、「章武」の印があるものの、本書に章甫の手が加わっている可能性も高い。

勢多章甫は、天保元年五月二日生（一八三〇年七月十二日）、七歳にて正六位上に叙せられ父同様左衛門大志に任ぜられた。その後、累遷して安政四年閏五月二十日（一八四九年七月九日）、正五位下、同五年正月十一日には二九歳にして父の跡を継いで、明法博士を兼任するに至る（『勢多氏備忘』）。

布施弥平治『明法道の研究』⁽¹⁰⁾は、文久（一八六一〜一八六四）度の『掌中職原掣要大成』を引いて、

「明法博士

検非違使

勢多正五位上^{中原}章甫」

と見えているので、この書には定員二名の明法博士のほかの一名がみえないから、欠員であったものであらうとし、「章甫は実にはわが国における最後の明法博士であり、明治にいたり、官制の大改革によって明法博士を辞したようである」と述べている。

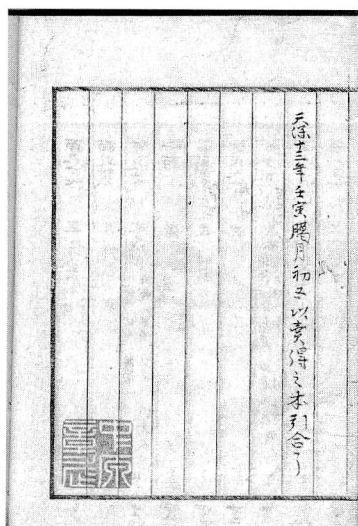
日本最後の明法博士を返上した勢多章甫は、後に宮内省の支庁に勤務し、明治二十七年十二月八日、六十四歳をもって京都において病没しているが、その間、『古事類苑』の編纂にも尽力し、帝王部九冊は勢多家の家学の蘊奥を凝らした書物となっている。⁽¹¹⁾ 無窮会に本書が蔵されるに至ったのは、神習文庫旧蔵者、井上頼図が宮内省図書寮に奉職していた機縁であらう。

③『勢多本類聚国史目録』の記述方法について

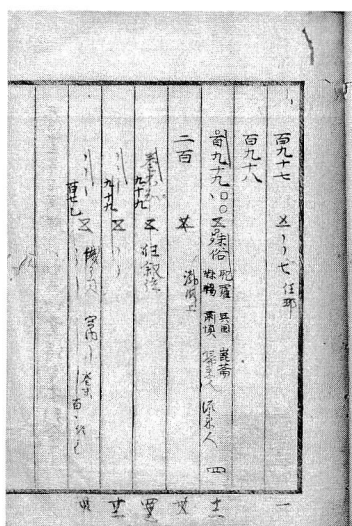
『勢多本類聚国史目録』の版面は、図①～③に示す通りである。

類聚国史目録	朱子學	卷第四	神祇一神代上	廿紙	四	三
神祇二神代下	廿五紙	廿六	廿七	廿八	廿九	三十
神祇三神代中	廿九紙	三十	三十一	三十二	三十三	三十四
神祇四神代下	三十三紙	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八
神祇五神代中	三十七紙	三十八	三十九	四十	四十一	四十二
神祇六神代下	四十一紙	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六
神祇七神代中	四十五紙	四十六	四十七	四十八	四十九	五十

〔図①〕 2丁表 冒頭部



〔図③〕 13丁裏 奥書



〔図②〕 13丁表

図版に示されたように、本書は、『類聚国史』全二〇〇巻の目録を列挙して、それぞれに自身が参看したと思しき書の符号と、それぞれの巻の武立、細目、および各書の残存状況と料紙数を付したものである。

校勘に使用した諸本とそれを略記した符号の凡例については、二丁表冒頭に次のように示される。

□……「陽明家」

○……「逸史」

、……「容塾」(土佐容塾蔵版本)

△……「佐野○(墨書)家蔵(青筆)」

「朱書鴨林家(赤筆)」

▽△……「所得記之「青筆」／都九十五冊「朱書」」(自身が入手した95冊)

／……「東本六十一冊」

さらに、書中では、朱・橙・青・紺・黒筆を使用して書かれ、それぞれの部立・項目に注記されている。

本目録に記載される部立の記述態度は、基本的に、所蔵の本および校勘に使用した典籍に書かれる部立名の原表記を尊重して記したものである。その理由として、以下のことを挙げることが出来る。後述の対照表の凡例もかねて、その特徴を以下に示しておく。すなわち、

①編次の序列で推定可能な部もあるにもかかわらず、次第の数をあえて欠いているものが見えること。

※巻一九は「神祇」とだけ記して編次の序数を欠いた記載がある一方で、編次の並び方によって内訳が推定可能な巻一七・巻一八では、それを欠巻の扱いにしている。

※巻二二と巻二三に「帝王三」が重出している(ただし、巻二二には数字を青筆で記す)

目も、いずれも抹消されているので、目録には反映されず、説には採択されていない。

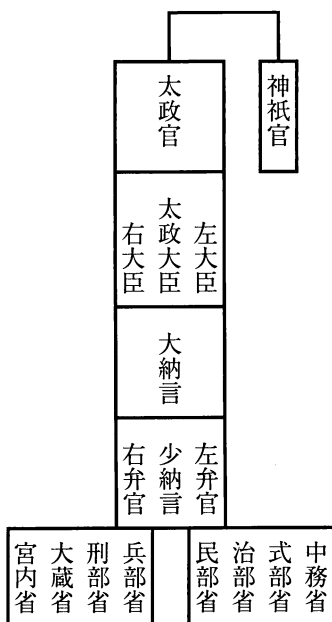
【四】『類聚国史』欠佚部の復原と、勢多本目録との比較（部名比較）

以下に、『勢多本類聚国史目録』に記された部名と、現存『類聚国史』（推定を含む）との比較表を示す。表の作成にあたっては、「現存」にて、国史大系本に記載の部名を示し、にて、「推定」にて、吉岡論文記載の『類聚国史』『欠佚部門復元表』に記載される推定部立を示し、それに「勢多目録」にて、『勢多本類聚国史目録』の記載状況を対比させている。また、補足事項として、それぞれの部立の配列がどのような根拠で成り立っていたかを「推」にて示し。【勢】にて『勢多本』の記載状況を付属して示した。

なお、『類聚国史』の配列には、令制職員令に基づく二官八省体制下におけるの各部署の職掌で必要とされる故実がまとめられていると読み取ることも出来る。その構造は、後に『延喜式』さらには、後代の官制注釈書へと受け継がれたものと想像されるが、本稿では、参考として各官各省の職掌事項と各部立との比較を一案として見出しに示すにとめておく。

〔1〕神祇官と神祇部（巻一～巻二十）

勢多目録	推定	現存	巻数
神祇一		神祇一	巻〇一
神祇二		神祇二	巻〇二
神祇三		神祇三	巻〇三
神祇四		神祇四	巻〇四
神祇五		神祇五	巻〇五



【推】 卷一七・卷一八は前後の巻の部門名とその序次により、卷一九は、卷二五の部門名とその序次による推定。	勢多目録	神祇十六		神祇十八	神祇	神祇二十
	推定		神祇十七	神祇十八	神祇十九	
	現存	神祇十六				
	卷数	卷一六	卷一七	卷一八	卷一九	卷二〇
【推】 卷一二・卷一三は前後の巻の部門名とその序次による推定。	勢多目録	神祇十一	神祇十二 _{〔青筆〕}	神祇十三 _{〔青筆〕}	神祇十四 _{〔朱筆〕}	神祇十五 _{〔朱筆〕}
	推定		神祇十二	神祇十三	神祇十四	神祇十五
	現存	神祇十一				
	卷数	卷一一	卷一二	卷一三	卷一四	卷一五
【推】 卷〇六・卷〇七は前後の巻の部門名とその序次による推定。	勢多目録	神祇六	神祇七	神祇八	神祇九	神祇十
	推定	神祇六	神祇七	神祇八	神祇九	神祇十
	現存					
	卷数	卷〇六	卷〇七	卷〇八	卷〇九	卷一〇

〔2〕帝王部・立后・後宮・諸王・人部と太政官中務省（卷二十一～卷六十九まで）

卷数	現存	推定	勢多目録
卷二一		帝王一	帝王一〔 <small>青</small> 〕
卷二二		帝王二	帝王二〔 <small>青</small> 〕
卷二三		帝王三	帝王三〔 <small>青</small> 〕
卷二四		帝王四	帝王四〔 <small>青</small> 〕
卷二五	帝王五		帝王五

【推】卷二一～二四は卷二五の部門名とその序次による推定。

卷数	現存	推定	勢多目録
卷二六		帝王六	
卷二七		帝王七	帝王七〔 <small>青</small> 〕
卷二八	帝王八		帝王八
卷二九		帝王九	帝王九〔 <small>青</small> 〕
卷三〇		帝王十	

卷数	現存	推定	勢多目録
卷三一	帝王十一		帝王十一
卷三二	帝王十二		帝王十二
卷三三	帝王十三		帝王十三
卷三四	帝王十四		帝王十四
卷〇三五	帝王十五		帝王十五

【推】卷二六・二七・二九・三〇は前後の巻の部門名とその序次による推定。

卷数	卷三六	卷三七	卷三八	卷三九	卷四〇
現存	帝王十六				後宮
推定		皇后一 <small>〔清水〕</small> 後宮 <small>〔坂本太郎〕</small>	皇后二 <small>〔清水〕</small> 後宮 <small>〔坂本太郎〕</small>	皇后三 <small>〔清水〕</small> 後宮 <small>〔坂本太郎〕</small>	
勢多目録	帝王十六	帝王十七 <small>〔青筆〕</small>	立后 <small>〔青筆〕</small>	皇后 <small>〔青筆〕</small>	後宮
卷数	卷四一	卷四二	卷四三	卷四四	卷四五
現存					
推定	東宮一 <small>〔清水〕</small>	東宮二 <small>〔清水〕</small>	東宮三 <small>〔清水〕</small>	皇親 <small>〔清水〕</small>	人一
勢多目録	諸王 <small>〔青筆〕</small>		諸王 <small>〔青筆〕</small>		人 <small>〔青筆〕</small>

【推】 卷二六・二七・二九・三〇は前後の巻の部門名とその序次による推定。

清水は「皇太子や親王を含めたやうな適当な部名は見当らないし、皇后部・後宮部と置かれてゐたことからす

【推】 現存諸本巻四〇には序次が立てられていないため、坂本説のように「後宮部」が複数巻にわたるとは考えづらい。清水説のように、後宮職員令には「後宮」は「謂。妃夫人嬪。」（義解）であつて、『類聚国史』巻四〇の記載も左記のように、後宮職員令を尊重した形跡がうかがえる。

【参考】 巻40・後宮部……妃、夫人、嬪、女御（年給官・月料・入道・追福…附出）、幸姫、官人職員、内侍司、官人職員、闌司、采女（女孺…附出）

ると、東（春）官部・皇親部となつてゐた可能性が強い」という。また、卷四五～卷六九までの序次は、坂本説を前提としたもの。

【勢】卷四三は、もとは卷四二に配されていたが、墨筆の移動記号により、卷四三に記す。

卷数	現存	推定	勢多目録
卷四六		人二	人【筆青】
卷四七		人三	人【筆青】
卷四八		人四	人四【筆青】
卷四九		人五	人五【筆青】
卷五〇		人六	
卷数	現存	推定	勢多目録
卷五一		人七	
卷五二		人八	
卷五三		人九	人九【筆青】
卷五四	人	人十	人十【筆青の み青筆】
卷五五		人十一	

卷数	現存	推定	勢多目録
卷五六		人十二	人十二【筆青】
卷五七		人十三	人十三【筆青】
卷五八		人十四	
卷五九		人十五	
卷六〇		人十六	

卷数	卷六一	卷六二	卷六三	卷六四	卷六五
現存	人				
推定	人十七	人十八	人十九	人二十	人二十一
勢多目録	人十七【 <small>書</small> 】	人十八【 <small>書</small> 】			人二十一【 <small>書</small> 】

【勢】巻五六・巻五七は、もとはそれぞれ巻五五・巻五六に配されていたが、墨筆の移動記号により、巻五六・巻五七に記す。

巻六一は右に「薨卒」と朱書。

卷数	卷六六	卷六七	卷六八	卷六九	卷七〇
現存	人				
推定	人二十二	人二十三	人二十四	人二十五	歳時一
勢多目録	人二十二【 <small>書</small> 】	人二十三【 <small>書</small> 】	人二十四【 <small>書</small> 】		

【推】巻七〇は巻七一の部門名とその序次による推定。

〔3〕式部省と歳時部（巻七十一〜巻七十五または七十六）

卷数	卷七一	卷七二	卷七三	卷七四	卷七五
現存	歳時二	歳時三	歳時四	歳時五	歳時六

推定				
勢多目録	歳時二	歳時三	歳時四	歳時五
				歳時六

〔4〕 治部省と音楽部（卷七十七）・賞宴部（卷七十八）

〔5〕 民部省と政理部（卷七十九～八十六）

卷数	卷七六	卷七七	卷七八	卷七九	卷八〇
現存		音楽賞宴上	賞宴下奉献	政理一	政理二
推定	歳時七 〔坂本太郎 山田孝雄〕				
勢多目録		音楽	奉献賞宴	政理一	政理二
【推】 卷七六は、坂本・山田による推定。					
卷数	卷八一	卷八二	卷八三	卷八四	卷八五
現存			政理五	政理六	
推定	政理三	政理四			政理七
勢多目録	政理三〔青 筆〕	政理四〔青 筆〕	政理	政理六〔青 筆〕	
【推】 卷八一・卷八二・卷八五は、前後の巻の部名とその序次による推定。					

〔6〕 兵部省・刑部省と刑法部（巻八十七〜八十九）

巻数	巻八六	巻八七	巻八八	巻八九	巻九〇
現存	政理八	刑法一	刑法二	刑法三	
推定					刑法四
勢多目録		刑法一	刑法二 <small>〔朱〕</small>	刑法三 <small>〔朱〕</small>	

【推】 巻九〇は、巻八九刑法部三の項目が「罪人中」であることによる推定。
【勢】 巻八七は「同二」〔朱〕の右に「刑法」〔朱〕と傍書。巻〇八八は、「同三」〔朱〕の右に「同上」〔朱〕と傍書。

〔7〕 欠巻（巻九十一〜九十五）

欠巻のため不明。二官八省の配列規則に準じた編纂原理があると想定するならば、この欠巻部分には、大蔵省・宮内省に関することがらが記されていたとも考えられる。または、「令」職員令と同じ職が列挙される巻第一百七最終部「家令」までの関連する記事が挙例されていた可能性もある。

巻数	巻九一	巻九二	巻九三	巻九四	巻九五
現存					
推定					

勢多目録				
【推】 山田孝雄は、巻九一～巻九五を「刑法部四～九」と推定する。				

〔8〕職官部（巻九十六～百十二）

巻数	巻九六	巻九七	巻九八	巻九九	巻一〇〇
現存				職官四	
推定	職官一	職官一	職官三		職官五
勢多目録	職官一〔推定〕	職官二〔推定〕		職官四	職官
【推】 巻九六～巻九八は、巻九九の部名とその序次による推定。					
【勢】 巻九三は、元「職官四」と記して抹消。					
巻数	巻一〇一	巻一〇二	巻一〇三	巻一〇四	巻一〇五
現存	職官六				
推定		職官七	職官八	職官九	職官十
勢多目録	職官六		職官八〔推定〕		
【推】 巻一〇二～巻一〇五は、前後の巻の部名とその序次による推定。					

巻数	現存	推定	勢多目録
巻一〇六		職官十一	
巻一〇七	職官十二		
巻一〇八		職官十三 ^{【推定】}	
巻一〇九		職官十四 ^{【推定】}	
巻一一〇			

【推】巻一〇六は、前後の巻の部名とその序次による推定。

巻数	現存	推定	勢多目録
巻一一一			職官十六 ^{【推定】}
巻一一二			職官十七 ^{【推定】}
巻一一三			
巻一一四			
巻一一五			

〔9〕京都部（巻百十六・百十七）と諸国部（巻百十八～巻百三十六あたり）、その他

巻数	現存	推定	勢多目録
巻一一六			京都上 ^{【推定】}
巻一一七			京都下 ^{【推定】}
巻一一八			諸国一
巻一一九			諸国二
巻一二〇			

勢多本類聚国史目録のこと

勢多目録	推定	現存	巻数	勢多目録	推定	現存	巻数	勢多目録	推定	現存	巻数	勢多目録	推定	現存	巻数	勢多目録	推定	現存	巻数
諸国十九			卷一三六	諸国十四			卷一三一	諸国九			卷一二六				卷一二一				
			卷一三七	諸国十五			卷一三二	諸国十			卷一二七				卷一二二				
			卷一三八				卷一三三	諸国十一			卷一二八				卷一二三				
			卷一三九				卷一三四	諸国十二			卷一二九	諸国七			卷一二四				
			卷一四〇	諸国十八			卷一三五	諸国十三			卷一三〇	諸国八			卷一二五				

推定	現存	卷数
		卷一五六
		卷一五七
		卷一五八
	田地上	卷一五九
田地□		卷一六〇

勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一五一
勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一四六
勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一四七
勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一四八
勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一四九
勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一五〇
勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一四一
勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一四二
勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一四三
勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一四四
勢多目録	推定	現存	卷数
			卷一四五

<p>【推】 卷一六〇は、卷一五九の部名による推定。 山田孝雄は、卷一六〇・卷一六一をそれぞれ「田地部中」「田地部下」と推定。</p>						勢多目録				田地上	
卷数	現存	推定	勢多目録	現存	推定	勢多目録	卷一六六	卷一六七	卷一六八	卷一六九	卷一七〇
卷一七一	災異五		祥瑞下	災異一		祥瑞下	災異一【青】	災異二	災異三	災異四【青】	
卷一七二		災異六									
卷一七三	災異七										
卷一七四		仏道一									
卷一七五		仏道二									

勢多目録		災異七		
【推】 卷一二二は、前後の巻の部名とその序次による推定。 卷一七四～一七六は、卷一七〇の部名とその序次による推定。				
卷数	卷一七六	卷一七七	卷一七八	卷一七九
現存		仏道四	仏道五	仏道六
推定	仏道三			仏道七
勢多目録		仏道四	仏道五	仏道六
卷数	卷一八一	卷一八二	卷一八三	卷一八四
現存		仏道九		卷一八五
推定	仏道八		仏道十	仏道十二
勢多目録		仏道九	仏道十	仏道十一
【推】 卷一八二・卷一八三・卷一八四は、前後の巻の部名とその序次による推定。				
卷数	卷一八六	卷一八七	卷一八八	卷一八九
現存	仏道十三	仏道十四		仏道十六
推定			仏道十五	
勢多目録	仏道十三	仏道十四	仏道十五 【書】	仏道十六
				風俗

【推】 卷一八二・卷一八三・卷一八四は、前後の巻の部名とその序次による推定。

巻数	推定	現存	勢多目録
卷一九一			
卷一九二			
卷一九三	殊俗□		(殊俗)
卷一九四	殊俗□		(殊俗)
卷一九五	殊俗□		殊俗六 ^マ _{葉青}

【推】 卷一九五～卷一九八は、前後の巻の部名とその序次による推定。

【勢】 卷一九三・卷一九四に部名は記載されないが、門目にそれぞれ「高麗・渤海」(卷一九三)、「同下」^朱 (卷一九四) が記載される。

巻数	推定	現存	勢多目録
卷一九六	殊俗□		殊俗五 ^マ _{葉青}
卷一九七	殊俗□		殊俗七
卷一九八	殊俗□		
卷一九九	殊俗□		殊俗
卷二〇〇	殊俗□		

【推】 卷二〇〇は、坂本太郎による推定。山田孝雄は「殊俗」「雑」「補遺」いずれかの可能性を指摘。

◇参考文献◇

◎山田孝雄「菅公の見識」(北野神社…編「菅公頌徳録」、官幣中社北野神社御祭神御生誕一千百年御鎮座一千年記

念大祭奉賛会、一九四四)

◎清水潔「類聚国史の篇目について」(『皇学館大学史料編纂所報』史料)一三、一九七九)

◎坂本太郎「類聚国史に就いて」(『史林』二二—二、史学研究会〔京都大学〕、一九三七)(坂本太郎『日本古代史の基礎的研究 上 文献篇』、東京大学出版会、一九六四・五)

◎吉岡真之「類聚国史」(『国史大系書目解題』下、吉川弘文館、二〇〇一・一一・二)

◎喜田新六「類聚国史の編纂について」(『本邦史学史論叢』上、史学会・富山房、一九三九・五・一四)

《注》

(1) 山岡浚明『類聚名物考』巻二六九書籍部第七(井上頼圀・近藤瓶城・校訂『類聚名物考』(五)、歴史図書社、一九七四・六)。

(2) 大隅和雄「古代末期における価値観の変動」(北海道大学文学部紀要十六—一、一九六八)

(3) 『職原抄』明法博士の条に「相当正七位上、唐名律学博士」とある。

(4) 布施弥平治『明法道の研究』(新生社、一九六六・九)

相田満「関東系『職原抄』注釈学をめぐる—その聖典意識—」(『中世説話の』意味)〈叢書・日本語の文化史1〉、笠間書院、一九九八・二)

(5) 『群書類従』巻一〇四・公事部所収。

(6) 『国史大系書目解題』下巻・類聚国史(吉川弘文館、二〇〇一・十二)

(7) なお、『国史大系書目解題』下巻(吉川弘文館、二〇〇二)によれば、国史大系本『類聚国史』の校訂には、

坂本太郎があたり、丸山二郎・山田康彦が編年索引の作成にあたったというが、坂本の著作を見る限りにおいても、『勢多本類聚国史』の名は見えない。

(8) 文政十三年「一八三〇」寅初冬再刻版・天保九年「一八三六」戊五月改刻版・嘉永五年「一八五二」壬子正月改刻版・慶應三年「一八六七」丁卯初夏改刻による。

(9) 無窮会所蔵にかかる勢多章武の他の著書について簡単に記す。

○温故録……無窮会神習文庫蔵(神五三五)写二冊。一冊目「温故録」(右端書「石清水臨時祭」)、二冊目「温故録」(右端書「賀茂臨時祭」、貼紙「明治三十八年十二月日知興／井上頼閑翁所蔵借本」)。

○服仮問答……無窮会神習文庫蔵(神一三五九六―二二)。四種合冊写本。表書左端上「久佐」、右端から

「令抄録／女房装束抄／地下諸司／服仮問答」。内題はそれぞれ「令」「女房装束抄」「地下諸司」「従文政

十二年正月 博士大夫判官蔵之／服仮問答附雑綴」。『神習文庫目録』四九一頁には、次のように記す。

「丙 合冊／合冊(異類合冊)写(版本ハ版と標記ス) 一〇六冊 番号一三五九六／二二……令抄録(勢多本四種)・女房装束抄・地下諸司(寛文九年九月十七日「一六七〇年六月十七日」)・服仮問答(勢多章武)」と

ある。いずれも作者を明記するものはないが、服仮問答(勢多章武)は、勢多章武の勘文を最も多く収める故、作者と同定したか。

(10) 布施弥平治『明法道の研究』(新生社、一九六六・九)

(11) 『古事類苑月報』三〇・法律部第三編(吉川弘文館、一九六五・九)に以下の通り記される。「古事類苑稿本がまとまって保存されている所としては、神宮文庫の他に、宮内庁書陵部、および広池学園などがあります。

◆書陵部所蔵本は、勢多章甫氏編纂の帝王部九冊で、皇典講究所時代の稿本にかかり、「国喪」「荷前」の二編

を収めています。勢多章甫氏は本姓中原氏、幕末時代の明法博士・検非違使で、維新後は宮内省に出仕し、古事類苑編纂にも関与して、明治二十七年十二月京都で没した人です。稿本は刊行本に比べると、編成・所収史料に相違は見られますが、内容は家学を反映した精緻な構成を示しています。」

付記…本稿は、平成二十一年度、日本学街振興会基盤研究（B）「和漢古典学のオントロジモデルの応用」（研究代表者・相田満）による成果の一部である。資料写真の掲載、紹介に御快諾いただいた、無窮会図書館に深謝申し上げます。